

生徒全員がクラスの一員として学んでいることを 実感できる国語科授業デザイン

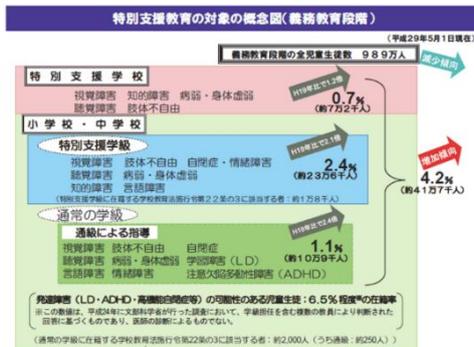
教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 平林諒

1. 研究目的と動機

本研究は生徒全員がクラスの一員として学んでいることを実感でき、その授業を国語科授業においてデザインすることを目的としている。筆者がこの研究を行う動機は2つある。

1つ目は大学4年次に行った教育実習で国語科の言語活動において特定の生徒のみが発言をしていた状況があった。その際、全員が自ら考えを持ち、考えを言葉につぶやくような授業を作りたいと考えたからである。挙手をしてその生徒の意見を他の生徒が知るだけでは、とすれば発言をしている生徒と教師の1対1の関係になりがちである。他の生徒が受け身にならない授業の工夫が必要だと感じた。

2つ目は同じく教育実習で配慮が必要な生徒が通常学級に在籍していたことからユニバーサルデザイン、インクルーシブ教育の観点を国語科授業デザインに取り入れたいと考えたからである。文部科学省の調査(平成29年)(図1)によると、通常学級において特別に支援が必要な生徒が6.5%在籍しているという。



(図1) 特別支援教育の対象の概念図

そこで特別支援学級と通常学級を行き来している生徒だけでなく、日常生活の中で何らかの配慮が必要な生徒も含めた国語科授業デザインを考える必要がある。

中学校『学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』及び、指導計画作成上の配慮事項には、次のような事項が追加された。

(8)障害のある生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。

以下は障害のある生徒に関しての記述である。

個々の生徒によって、見えにくさ、聞こえにくさ、道具の操作の困難さ、移動上の制約、健康面や安全面での制約、発音のしにくさ、心理的な不安定、人間関係形成の困難さ、読み書きや計算等の困難さ、授業の集中を持続することが苦手であることなど、学習活動を行う場合に生じる困難さが異なることに留意する。『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』(p.135)

下線部については多くの生徒に当てはまることであり、これを克服するような授業デザインに取り組みたい。

以上のことから本研究はこうした学習指導要領の改訂を踏まえて新たな取り組みを提案していきたい。

2. 研究のねらい

筆者は生徒全員がクラスの一員として学ん

でいることを実感できる授業にする為に以下2つの取り組みが重要になると考える。

(1) 全員の生徒が授業を通して同じ土台に立つ

同じ土台に立つとは、生徒1人ひとりが授業で扱う文学的文章に対して、自分なりの考えを持てることである。次に言語活動で他の生徒と交流し、意見交換を通して他の生徒の意見から自分の考えを見直そうすることで新たな考えがあることを知り、お互いの考えを更に深めることができる。このように自身が文学的文章に対する考えを持ち、他の生徒と意見を交換し合うことが同じ土台に立つことだと筆者は考える。

(2) 自分の意見が授業で取り上げられる

生徒がクラスの一員として学んでいることを実感する為には教師が生徒の意見を取り上げるだけではなく、生徒同士がお互いの意見を聞いて感想を持ち、自分の考えと比較し自分の考えを見直すことが大切だと考える。その為にも筆者はユニバーサルデザインにおける共有化が必要であると考えた。効果的なユニバーサルデザインについて桂(2016)¹は焦点化、視覚化、共有化の3つを提案している。共有化することについて桂(2016)は、

一般的には、話し合い活動をすれば、1人ひとりの理解が深くなると思われています。でも、本当でしょうか。確かにそういう子もいるでしょう。しかし、話のやりとりについていけずに、かえってわからなくなる子もいるに違いありません。また、1人ひとりの理解を教師が評価することも困難です。誰かがいい発言をしたとします。それを教師が価値付けます。板書も

します。他の子はそれをノートに写します。それで他の子も理解できたとは言えません。理解は、表現しない限りわからないのです。全員が表現する場が必要です。話したり書いたりしてこそ、理解の深まりが評価できます。授業で共有化するのは、1人の考えの良さが他の子たちに伝わるようにすることです。²

と述べている。共有化を行うことは話のやりとりについていけない生徒への配慮になるだけではなく、生徒全員がクラスの一員として学ぶことに繋がる。

共有化には教師側が行うものと、生徒側が行うものがある。共有化の手立てとして宗實(2016)は学びの深まりを「実感」させることが大切であると述べている。宗實(2016)は具体的に以下のように述べている。

「共有化することで「学級のみならずと学ぶと、より学びが深くなる」と実感させることが大切である。実感させるためには「価値づけ」することが必要だ。例えば、「今日は〇〇さんの発言のおかげで学習内容が深まりましたね」「〇〇さんの△△という考え方は、場所が変わっても応用できる考え方ですね」「今みんなでシェアしていった意見は、今日のポイントですね」などである。」

宗實(2016)の言う共有化の手立ては教師側が共有化する際に生徒側の発言にプラスの価値付けをし、生徒側の学びの深まりを働きかけるものであった。この場合は教師側がプラスの価値付けを行うものであるが、これを教師が日常的に繰り返すことにより生徒達自身が他の生徒の意見にプラスの価値付けができるようになることが望ましい。以上の(1)(2)を柱として実践校の生徒達の様子を踏まえ授

¹桂(2016)の初版は(2011)

『国語授業のユニバーサルデザイン全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』

引用は改訂版(2016)によった。

²引用下線は筆者によるものである。

業をデザインした。

3. 授業実践について

実際に行った「生徒全員がクラスの一員として学んでいることを実感できる国語科授業デザイン」の実践について以下に概要を示す。

(1) 授業実践の概要

- ①対象校 山梨県内の公立中学校
- ②期間 2020年9月 全5時間
- ③対象 第1学年1クラス 29名
- ④教材 米倉齊加年『大人になれなかった弟たちに…』
(光村図書出版『国語1』より)

⑤単元名
つながりの中で～文章の展開に着目して、心情や事実をとらえる。～

(2) 作品のあらすじ

『大人になれなかった弟たちに…』は次のようなあらすじである。

太平洋戦争中、乳児の弟の「ヒロユキ」が栄養失調で亡くなるまでの様子が「僕」の視点で書かれている。食べ物が無いことによるひもじさや、自分が食べるのを我慢して「僕」や「ヒロユキ」を育てる「母」の必死さが伝わってくる作品である。泣いている母の挿絵を通して登場人物の心情を捉えることもできる。

(3) 授業実践クラスの実態と手立て

ここでは授業実践を行ったクラスの生徒達の実態と手立てを述べる。生徒達には以下2つの特徴があった。

① 単元ごとに行う初読の感想、学習後の感想を書くことが苦手。

本校の生徒達は国語科授業で単元の始めと終わりに感想(初読の感想、学習後の感想)を記入することになっている。授業実践前の授業観察を通して生徒達から「初読の感想は何を書いたら良いかわからない」「沢山書くことができない」などの意見を聞くことが多くあ

った。

そこで初読の感想を記入し易くなるような手立てを工夫した。1つ目は初読の感想の前に情景をイメージできるように戦争の写真などを読む前に見せていく。少しでも戦争をイメージできるような工夫である。特に B29 については本作品において主人公の心情を理解する上で鍵となる部分であった為、事前知識を確認することが重要である。2つ目は感想を書くためのポイントを教師が示し、記入し易くなるよう工夫した。具体的には疑問に思ったところや心に残った場面、心に残った言葉の3つに着目するよう示した。

学習後の感想を書くことが苦手な生徒への手立てとして、生徒達にこの単元を通して自分の考えや視点を持ってもらう為に、教師側の発問の工夫を行う。『大人になれなかった弟たちに…』は主人公「僕」の視点で文章が書かれている為、『光村図書出版「国語1」指導書』では「僕」の心情を中心に読み取る発問が多い。生徒と「僕」は世代が近いが戦争というギャップがある為、戦争は二度と繰り返してはいけないという教訓の読み取りに留まってしまう。それを打ち破る手立てとして、身近な家族の気持ちを考えることで想像力を働かせ易くしていく。「母」の辛さを考える発問を取り入れることで「僕」の気持ちだけでなく、「母」の心情を考えることを目指す。

② 考えた意見を発表する生徒が常に一緒になっている。

この実態は筆者が教育実習時に感じたことと重なる部分である。考えた意見を発表する生徒が常に同じである原因としては、考えた意見を上手く伝えられない事が考えられた。

机間巡視を行う中で気付いたこととして、全体の前で発表をしないだけであり、意見をノートに記入している生徒もいた。そこで、そのような生徒に対して「とても良い意見だね、ぜひ皆にも共有して良いかな？」と話しかけ、補助に努める手立てを行う。

更にクラスの全体の前で意見を伝えられない生徒に対しては、ワークシートやホワイトボードに意見を記入し、全体発表の前に班での発表、意見交換を取り入れることとしたい。人前で話すことが得意でない生徒もいる中で、ワークシート³やホワイトボードのように口頭ではなく文字を通して意見交換をすることで、話すということへの負担を減らすことができる。

加えて、教師が生徒全員の作品に対する感想を記名してプリントを配布することで、生徒間での共有化を行いやすくした。

(4) 配慮が必要な生徒に対しての手立て

授業実践を行うクラスの中の配慮が必要な生徒の特徴を述べる。特徴として大きく2つに分かれた。ここではAさん、Bさんと述べる。

【Aさん】

Aさんのタイプとして、教科書を机に出さない時があり、授業の集中の持続が苦手である。本文を抜き出して答えるような問いや知っていることを一問一答で答えるような問いを好まない、という特徴があった。

以上のことからAさんのタイプに対しての手立てとして、ただ教科書の内容を抜き出す発問だけではなく、あらすじを理解して考える発問(=言葉に立ち止まる発問)をすることで、授業内容に興味を持たせる。

【Bさん】

Bさんのタイプは、前に出たの発言や授業中に挙手をすることが苦手であることから、意見を持っているが、それを伝えることが得意ではない。

以上のことからBさんのタイプに対しての手立てとして、Bさんの考えた意見を他の生徒に共有化させる。具体的に、全体発表の前に班での話し合いを挟む。ワークシートやホワイ

トボードを用いて口頭ではなく文字による意見交換を行う。

(5) 各時間の授業実践

授業実践で行った各時間のねらい、概要と発問、検討した手立てに基づく実践上の工夫した点について述べていく。Aさん、Bさんに対して工夫したことがこのタイプのみに向けたものではなく、全員の生徒に向けた手立てになることを留意した。また、全時間ワークシートを用いて授業を行った。

① 1時間目

【ねらい: 作品への興味・関心を高めると共に、読み取りの際の着眼点を確かめて初読の感想を書く。】

1時間目の授業概要と発問、工夫した手立ては以下である。

・ 範読前に太平洋戦争について聞いたこと知っていることを出し合い作品の背景となる時代状況を確認した。

『大人になれなかった弟たちに…』の文章中に出てくる戦争に関わる言葉(防空壕、原子爆弾、B 29、甲府大空襲など)を確認した。B 29の描写は文章中で何度か登場し、主人公の心情を理解する上で鍵となる部分である。

～3つのポイント～

・ 初読の感想を書く際に、初読の感想を書くポイントを3つ提示した。

- i 心に残った場面とその理由
- ii 心に残った言葉とその理由
- iii 疑問に思った場面とその理由

3つのポイントを提示することで、初読の感想を記入し易くした。

② 2時間目

【ねらい: 僕の行動に着目して、僕と母の心情

³ ワークシートを使用することで意見を持ちにくい生徒も意見を書き留めやすくなる。

を考える。】

2 時間目の授業概要と発問、工夫した手立ては以下である。

- ・1 時間目の初読の感想全員分を記名で配布し、読み合った。

この手立ては、1(1)で述べたように全員の生徒が授業を通して同じ土台に立つ為の工夫である。1(2)で述べた教師側が生徒一人一人の考えを尊重しながら共有化を行った。これは自分の意見を上手く伝えられない生徒の為の工夫でもあった。

- ・「僕」の視点のみではなく、「僕」から見た「母」の気持ちを考える。

発問) 「母は僕がミルクを飲んでいることに気が付いているのかを考えてみよう。」

3(3)①の学習後の感想を書き易くする工夫で述べたように、生徒と「僕」との戦争というギャップを埋める為に身近な「母」の気持ちに注目させることで、生徒達がこの作品の主題に迫っていけると考えた。まずその第一歩として初読の感想で多くの生徒が記入していた、「僕」が「ヒロユキ」のミルクを飲んでいたという行為に立ち止まらせ、ミルクを管理している「母」が「僕」の行為に気が付いているかを生徒に考えてもらうことをねらいとした。

③ 3時間目

【ねらい: 僕の視点を通して母の行動、心情を考えると共に言葉に立ち止まって考える。】

3 時間目の授業概要と発問、工夫した手立ては以下である。

- ・疎開先を探す「母」の様子を「僕」の視線で捉える。

発問) 「僕はなぜ母が「悲しい顔」をしていると感じたのか。」

「強い顔とはどのような顔だろうか？」

この場面は疎開先を探す「母」と「僕」は親

戚の田舎へ引っ越しの相談に行くが、親戚の人はうちに食べ物はないと言い、追い払う。食べ物を貰いに行ったわけではないのに勘違いをされてしまった。その際の「母」の顔は「僕」から見て、強くて悲しい顔であり、美しいと思ったという場面である。発問では一見分かるようで分からない言葉にあえて立ち止まらせる工夫をした。強い顔とはどのような顔かを実際に生徒達が行い、直感的に考えてみた。孤立無援の状態にある「母」の内面を考え、浮かべた表情から「母」の気持ちを想像することをねらいとした。

④ 4時間目

【ねらい: ヒロユキの死から僕と母の心情を捉える。】

4 時間目の授業概要と発問、工夫した手立ては以下である。

- ・「母が初めて泣きました」の一文と、泣いている「母」の挿絵のそれぞれの位置を確認し、作者が母の挿絵に込めた思いを考える。

発問) 「母の挿絵について考えてみよう。この絵は本文のどの母を表しているか。」

物語の最後の場面で「弟」ヒロユキは栄養失調の為死んでしまう。亡くなった「弟」を棺に入れる際に今まで一度も涙を流さなかった「母」が涙を流す。この場面を読み解く際に、その場面よりも前のページに「母」の涙を流した挿絵 (p110) があり、挿絵の前には疎開先を探す引っ越しの場面がある。この挿絵はいつの「母」を指しているかを考える発問であった。この発問は、泣いている「母」の挿絵の位置の意味を考えることをねらいとしている。この作品の出典は作者米倉斉加年が絵と文を執筆した絵本『大人になれなかった弟たちに…』であり、絵本を確認すると挿絵は教科書と同じ引っ越しの場面と同じ位置に置かれており、原作の通りの配置になっている。

⑤ 5時間目

【ねらい：作者はこの作品にどのような思いを込めたのかについて考える。】

5 時間目の授業概要と発問、工夫した手立ては以下である。

・題名『大人になれなかった弟たちに…』から、この作品は誰に向けて書かれた作品なのかを考える。

発問 「作者はこの作品を誰に向けて書いたのだろうか。」

この作品を全て読んだ後に、作者はこの作品を誰に向けて書いたものなのかを考える発問を行った。1～4 時間目の中で「僕」の視点だけでなく「僕」を通した「母」の気持ちを考えてきた為、誰に向けて書いたのかについて生徒の中で、戦争で亡くなった若い人、母、読み手など、多数意見があった。この発問を考えることで次の発問に繋がった。

・題名『大人になれなかった弟たちに…』の後に続く言葉を自分なりに考えてみる。

発問 「題名『大人になれなかった弟たちに… p6』の後に来る伝えたいことの文を短く書いてみよう。」

この手立ては、本単元で学習したことを用いて自分なりの考えを言葉で表してみることである。実際の授業では共有化として、班で話し合った際にホワイトボードに班のメンバーの考えを記入し、その後班長がホワイトボードを持ち全体の前で、班内で出たものを発表するという活動を行った。

4. 授業の考察と成果

(1) 全体の考察と成果

1 時間目に行った初読の感想、5 時間目の題名の後に来る言葉の発表、5 時間目終了時の学習後の感想の 3 つについて学習前と学習後の変容をみとる為に、分析を行った。

1 時間目の初読の感想を書く 3 つのポイン

ト (i 心に残った場面とその理由、ii 心に残った言葉とその理由、iii 疑問に思った場面とその理由) を提示したことで、「何を書いたら良いか分からない」という生徒は見られなかった。実際の生徒の記述は以下である。

- i) ・ミルクを貰うために着物をあげてしまう場面。
 - ・引越しの相談に行った場面。
 - ・小さな小さな棺にヒロユキが大きくて入らなかった場面。
- ii) ・母の「大きくなっていっただね」
 - ・「母は初めて泣きました」
 - ・「僕たち子供も必死で守ってくれる母の顔は美しいです」
- iii) ・若いヒロユキは自分の病名がわからなかったのかな？
 - ・疎開者たちはなぜ配給がなかなかもらえなかったのか？

以上のように2～5 時間目の授業の中で取り扱う内容に視点を持つことができた。しかし、場面や言葉を選んだ理由までを記述している生徒は居なかった為、この時点では内容を深く落とし込めていないと言える。

それに対して 5 時間目の学習後の感想では記述がより詳しくなり、本文に対する読みが深くなったことが分かった。(表 1) は生徒の感想の中から 4 名を取り上げたものである。

(表 1)

	初読の感想	学習後の感想
1	全部を読んで戦争は悲しいものだったと思った。	僕はヒロユキもだけれど母にも感謝をしていると思う。
2	僕が隠れてミルクを飲んだ場面。	B29 の最後の描写は死すら怖くなくなってしまいうぐらいヒロユキの死の重さが伝わってきた。

3	弟は死んだという言葉。	母の美しい顔という表現を読んで、作者は母に対しての思いが強いと思った。
4	母の「大きくなっていったんだね」という言葉	初めて泣いたところと挿絵で泣いていた母を比べて、作者の工夫に驚いた。

上記の表から分かる通り、初読の感想では戦争全般に関すること、本文に書いてある出来事、語り手や登場人物の言葉を記述している。それに対して学習後の感想では登場人物の悲しいだけではすまされないような深く複雑な心情を読み取ることができている。初読の感想と学習後の感想の変容から本文に対する読みが深くなったと言える。特に3時間目の「強い顔」に対しての発問、4時間目の「母」の挿絵の位置に対しての発問によって生徒の中で自分なりの考えを持ち、「母」に対する見方が変わった。生徒は「僕」の視点を通して「母」の思いに気付いたことで「僕」の「母」に対する思いにも気が付くことができた。生徒と「僕」の間にある戦争という高い壁は、生徒達の身近な存在である自分の母と重ねることで少し低くすることができた。これを「母」の心情を考える発問をしたことの成果としてあげる。

(2) 個の考察と成果

次にAさん、Bさんの授業を通しての変容を述べていく。

【Aさん】

Aさんのタイプへの手立てとしては、ただ教科書の内容を抜き出す発問だけでなく、あらすじを理解して言葉に立ち止まらせる発問を行い、授業内容に興味を持たせることであった。

結果としてノートを普段記入しなかった生徒がワークシートに回答を記入するようにな

った。また発問に対して自ら考えようとする姿勢が見られた。要因として3、4時間目の取り組みが考えられる。

3時間目の「強い顔とはどのような顔だろうか？」という発問の際に、補助発問にて、「怖い顔だったら、美しいという印象に残るかな？」と伝えたところ、周りの生徒と怖い顔を実際に行い合う様子が見られた。

4時間目では「母の挿絵について、この絵は本文のどこを指しているだろうか？」の発問を行った。それに対してAさんは「この発問は難しい。隣と話し合って良いですか？」と、筆者に聞いてきた。

Aさんが変わったのは、一問一答で答えられるような発問ではなく、言葉に立ち止まらせるような発問、作者の工夫を考えさせる発問をしたことが要因であると考えられる。

【Bさん】

Bさんのタイプへの手立てとしては、Bさんの考えた意見を他の生徒に共有化する。その際、全体発表の前に班での意見交換を挟む。ワークシートやホワイトボードに考えを記入し、口頭ではなく文字で意見交換を行うことであった。

結果として意見を伝えることが得意ではない生徒がクラスの一員として学ぶことができた。このきっかけとして2、3、4時間目の取り組みが考えられる。

2時間目で初読の感想全員分をクラスに配布した。

3時間目の「強い顔とはどのような顔だろうか？」という発問の際に補助発問で、「班の周りの生徒と強い顔を実際にやってみよう」と投げかけた。その結果、Bさん本人が強い顔を行ってはいなかったが、班の生徒の強い顔を作っているのを見て笑う様子が見られた。

4時間目ではBさんの挿絵の位置のズレに対する考えが、班で話し合う際にワークシートを通して班の生徒に伝わる。その後、Bさん

の回答が班の回答となった。

Bさんが変わったのは、2時間目で初読の感想を配布して他の生徒がBさんの考えを知ったこと、3時間目で班に入りやすい雰囲気を作ったことがきっかけとなり、4時間目のグループワークで自分の意見を伝えることができた。ワークシートを用いたことも自分の意見を伝えやすくなったことが要因であると考えられる。

5. 研究全体のまとめ

(1) 授業デザイン

ここまでの研究全体を通して分かったことは、全体の変容と個の変容の要因は、発問の工夫をしたことであった。この発問はAさん、Bさんのタイプのみに向けた発問ではなく、全体に向けた発問であった。つまり、Aさん、Bさんのタイプに向けた手立てが全体においても有効であったと言える。全体の中には感想を持つことが苦手な生徒、読みを掘り下げることが苦手な生徒、自分で文章中のどこを指しているかが分からない生徒など、国語に対して苦手意識がある生徒が居たが、「僕」や「母」など登場人物の深く複雑な思いを読み取ることができるようになった。

「生徒全員がクラスの一員として学んでいることを実感できる国語科授業デザイン」を目指して行ってきた手立ては、個から全体へ、全体から個へと双方に有効であった。これはユニバーサルデザインに配慮された授業実践となったと言える。

(2) 課題

授業実践を通して見えた課題は、教師の発問をより意味付けすることの必要性である。教師の発問にどのような意味があるのか、何の為にその課題に取り組むのか、のように発問の意味が見えないものに生徒はやらされていると感じてしまう。発問の意味を伝えることができれば、より生徒達を巻き込んだ授業

にできるのではないかと考える。

6. 終わりに

今回は1単元『大人になれなかった弟たちに…』の文学的文章での試みであった為、筆者の発問の工夫自体は作品毎に変わってしまう。しかし、発問をどのように共有化するについては2つの共有化を意図して授業デザインした。これらの共有化は他の文学的文章や説明的文章にも汎用性があると思われる。

hi

参考文献

- ・桂聖(2011)(2016).『国語授業のユニバーサルデザイン 全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』. 東洋館出版社
- ・宗實直樹(2016).「小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン」
(https://www.kyoikushuppan.co.jp/textbook/shou/shakai/files/syakai_ud_04_16_0831.pdf, 閲覧日:2021/1/27)
- ・米倉斉加年『大人になれなかった弟たちに…』光村図書出版「国語1」より
- ・米倉斉加年『大人になれなかった弟たちに…』偕成社(1983)
- ・文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』
- ・『光村図書出版「国語1」指導書』
- ・内閣府(2018)「平成30年版 障害者白書」(https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h30hakusho/zenbun/h1_03_01_01.html, 閲覧日:2021/1/27)

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力頂いた実習校の校長先生をはじめ先生方や生徒の皆さん、ご指導頂いた先生に厚く御礼申し上げます。